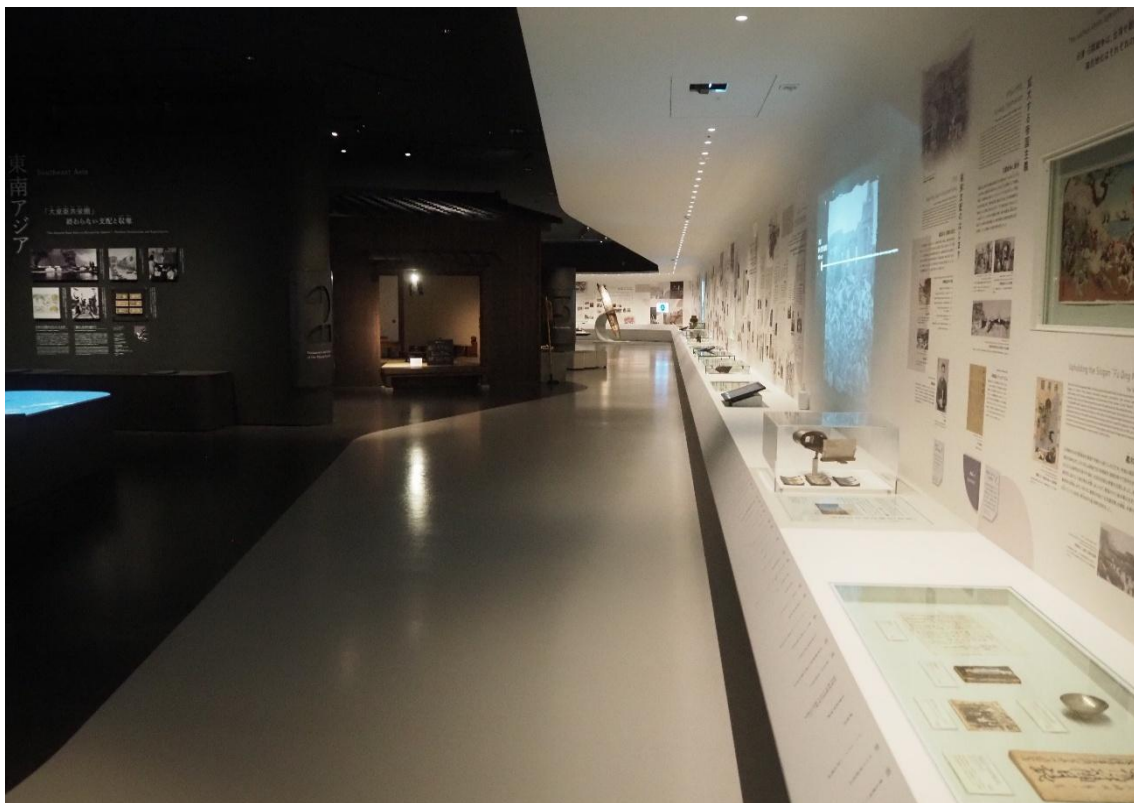


立命館大学国際平和ミュージアム常設展示（右側：年表展示、左側：テーマ展示）



立命館大学国際平和ミュージアム常設展示（テーマ展示1「帝国日本の植民地・占領地」）





南洋群島 帝国支配に翻弄された島々

植民地の開発

第一次世界大戦に参加した日本は、赤道以北のドイツ領ミクロナシアを「南洋群島」と名づけて占領し、1922年からはパラオに南洋庁を置いて国際連盟の委任統治領として統治しました。最初に大規模な開発が行われたのはサイパン・テニアン・ロクです。半官半民の南洋興発株式会社がこれらの島を台湾に次ぐ砂鉄の島に変貌させました。1930年代半ば以降は、国策会社の南洋拓殖株式会社が資源豊かな東南アジアに接近するパラオを「南進」の拠点とする開発を進めました。

支配と被支配のはざま

1942年当時、南洋群島には現地住民5万2000人、日本人8万6000人、朝鮮人6000人、外国人98人が暮らし、日本人のうち5万人は沖縄出身者でした。南洋興発が甘蔗栽培に慣れた沖縄出身者を積極的に募集したからです。次第に「一等国民 内地人、二等 沖縄人、三等 朝鮮人、四等 島民（現地住民）」とする見方が広まり、沖縄と朝鮮の人びとは差別されつつ差別する複雑な立場に置かれました。1944年には日本海軍が群島全域を戦場にしたため、多くの人が犠牲になりました。

ロクは何百年もかかって村をつくった。……ところが南洋庁は現地の人追っ払って、南洋庁のもの（官有地）にしてしまった。その土地を南洋興発が使っていた。ロクは土地が深くあまりいい土地ではなかった。現地の人が昔から使っていた所だけいい土地で、米を作る水田もあった。……「南洋庁は現地住民を」土地の悪いダダチに移させた。ここは遠慮が出て大変なところだった。南洋庁から『家を壊して跡地を整理しろ』と命令された。その時が一息消えた。……「勝手さざるじゃないか。希望の土地はここだけだ」と、初めはみんな反対して訴えた。だが測量員たちは、「三等国民のくせに抵抗するのか」と終てぐりつけた。

出典 石上正夫『日本人と密かなる南洋の民と帝国警察』(大月書店、1983年)
フィリップ・メンディオウさん（1911年生まれ）ロク島の先住民族チャモロのメンディオウさん一家は、南洋庁から無理やり立ち退きを命じられた。

サイパンのチャモロ一家
マリネオ達島先住民チャモロは、スペイン時代に苛烈なカトリック布教政策を受け、西洋風の生活様式を取り入れていた。建設 立命館大学図書館
南洋庁編『南洋群島概説』(南洋協会南洋群島支部、1932年)

退ぶのは沖縄の人しか集まらない。当時は、ヤマトウとわね、タイチーとか言いよった。わけ。子どもとね。そういう方々とはよって距離を置いてね。朝鮮の人、いましたよ。向こうは、第一が内地の方。第二が沖縄の人。第三が朝鮮人。第四が現地人と言っね。沖縄の人がとにかく多いですよ。だから内地の人とも喧嘩するし、「朝鮮人馬鹿にするな」って言われたことあるんですよ。

出典 西原純子『戦後の記憶を聞く……沖縄・南洋群島に生きたひとびとの声と証』(集英社、2016年)
知念玉光さん（1932年生まれ）
子どもたちの言葉にも、内地出身者・沖縄出身者・朝鮮人・島民との間に序列があると感じ取られていた。知念さんも、同じ学校に通う内地出身や朝鮮出身の子たちとは親しく交わらなかったらしい。

『図録 立命館大学国際平和ミュージアム』（合同出版、2023年）より